

第一号

『ことば遊び』

同窓会会報 別冊

「あれこれ」

大東文化大学同窓会

「あれこれ」

思いつきで楽しんでみませんか。  
世の中ぎゅうぎゅうして余裕がないですね。  
自分で余裕を作りましょう。

若いと言う事は、何でも吸収することが出来る時です。  
老いると言う事は、経験・体験の宝庫です。

若さと、老入りが手をくめば明るい人生が見えてくる。  
若さの未来、老いの未来、常に未来はあります。

《昔話と言葉について「あれこれ」を語っていきます》

「ことば遊び」

昔話・俳句・川柳・都々逸・詩・和歌・小唄・落とし唄・判じ絵・  
重文・回文などなど、たくさん「ことば遊び」があります。

日本はことばの宝庫です。多くの文化が生まれてきました。文化を  
楽しみながら心に余裕を持ちましょう。

学ぶと言う事は、教わるだけではなく、自分で自分を養う事だと  
思います。何かを見つけた事が自分を見つけた事です。

大いに「ことば」で楽しみ、遊びましょう。

心に余裕が出来れば、貴方の未来は見えてくるでしょう。『心豊かに』

今日は、「あれこれ」を手にとって頂き有難うございます。

「ありがとうございます」聞いて気持ちのいい言葉です  
ね。

「ありがとうございます。どういたしまして、とか、お互いさまです」  
と返しますね、感謝の気持ちを素直に出せる事は素晴らしいことす  
ね。

「ありがとうございます」という言葉は、人間関係を円滑にする基本  
中の基本といえるでしょう。

きれいな心の言葉を「言霊(ことだま)」と言います。「ありがとう・  
嬉しい・楽しい・幸せ・感謝しています・愛しています・許します」  
などいろいろです。良い言葉は人をやさしくしてくれます。人とのお  
付き合いの中で大事な言葉だと思います。

《言霊を知った時にできた言葉を書きます》

『ありがとうってなあに』

自然に出せる美しいことば

感謝を表わす最大限のことば

いつごろから素直に言えたかな

記憶にないが、小さい頃から自然に言っていた気がする

両親・祖父母・まわりの人達が教えてくれたのだろう

社会は一人では生きて行けない、いろいろと教わりながら

大人になつていく、何とありがたいことか

人の教えを大事にして、恥ずかしくない大人へと成長していく

社会への感謝「ありがとう」何度言ってもすばらしい言葉

心を明るくしてくれる。「ありがとう」

「恥入る」を肝に命じながらこのような言葉を書いています。

・老いて恥をかくのはつらい、でも、老いたからこそ素直に自分の生きざまをさらけ出してもいいのかなとも思います。

・若い人は、これからますますいろんなことを吸収していかなければなりません。  
大いに恥をかき自分で学んでください。

「こんな言葉があります」

・失敗は成功の第一歩です。失敗したことを喜びなさい。これで成功へ一歩近づいたと思える人は、必ず成功するでしょう。

・仕事や人生が上手くいかないのは当たり前、なぜならまだ道半ばだからです。

(恥・失敗はこれからの肥しです。おおいにチャレンジしてください)

ふと、思い出した言葉

「コロンプスの卵」

・スペインの航海者コロンプスが大西洋横断祝賀パーティの席上「航海していれば陸にぶつかるのはあたりまえ」と嫌味をいわれた。それではとコロンプスが「卵をテーブルの上に立てられるか」と問題をだすと、誰も出来ない。そこでコロンプスは卵の尻の部分をつぶして立ててみせた。「簡単に思える事も、最初にそれを思いついて成し遂げるのはとても難しい」困難に思われていることでも、発想次第で可能になる。

### 「エジソンの言葉」

・「私は1%のひらめきがなければ99%の努力は無駄になると言つたのだ。なのに世間は勝手に美談に仕立て上げ、私を努力の人と美化し、努力の重要性だけを成功の秘訣と勘違いさせている」  
・私は失敗したことがない。ただ、1万通りの、上手くない方法を見つけただけだ。  
・なぜ、成功しない人がいるかというと、それは考える努力をしないからだ。

《比較昔ばなしをお読みください》。

同じ題名の物語です。二話ずつ載せています。

### 「おの字」 「仁王か」 「天人女房」 (羽衣伝説の中から)

#### 『おの字』

続立川むかし話

娘が年ごろになったので、母親が、「言葉は、なるだけ丁寧に、言うんだよ。(お)の字をつけて、やさしく言うんだよ」と、ふだんから教えていたらばね、あるとき、人が来て、娘を見て、「こちらの娘さんは、いくつになりました」と、聞いたんだね。娘は、「私は、おにじゅうおにになります」って、いったんだって。  
二十二歳になって、そんなふうにあった娘の話がありましたね。馬鹿ていねいだとか、気がしれないとか。

#### 『おの字』

きょうの江戸小話

一人娘がお嫁に行くので、お母さんが娘に言いました。  
「お前は言葉づかいが悪いから、気をつけるんだよ。言葉の前には『お』の字をつけて、ていねいに言うんだよ」  
「『お』の字をつけて言えばいいんだな。わかった」  
それから無事に結婚式が終わり、娘はお嫁さんになりました。  
次の日、娘はおしゅうとめさん(↓おむこさんの母親)に言いました。  
「お台所のおすりこぎ棒が、お風に吹かれて、おころん、おころんと、おなっています」  
それを聞いたおしゅうとめさんが、娘に注意しました。  
「ていねいなのはいいが、そんなに何にでも『お』をつけるもんじゃないよ」

しばらくして娘が里帰りをした時、その時の話しをするとお母さんは言いました。

「それは、おしゅうとめさんの言う通り。あんまり『お』ばかりつけるのも、おかしいよ」

「『お』をつけると、おかしいんだな。わかった」

娘が里から帰ると、おしゅうとめさんが聞きました。

「里では、みなさんおかわりなかったですか？」

娘はお母さんから、あまり『お』をつけるなど言われたのを思い出して答えました。

「はい、やじも、ふくろも、元気」

これには、おしゅうとめさんもあきれてしまいました。そしてこんな娘では困ると、とうとう里に帰されてしまったそうです。

♪ちゃんちゃん

## 『仁王か』

続立川のむかし話

観音様がね、毎晩、夜遊びに出かけるんで、「どうも、おかしい」って思った仁王さまは、ある晩、そうっと観音様の後をつけていったんだよね。

仁王さまは、後をつけているの知らないだろうと思って、ずっと後をつけて行ったんだって。そしたら、観音様がふと、立ち止まって、大きなおならを、「ブーッ」としたんだって。仁王さまがびっくりしている、観音様が「ニオウか」っていったって話なんだよね。

## 『仁王か』

民話の部屋―長野県―

むかし、ある寺に仁王門（におうもん）があつて、その中に大っきな仁王様がごさつしやつたそうなの。

仁王様は一日中、夜も昼も休むひまなく仁王門の中で立ち続けているので、退屈で退屈でしかたがなくなつてしまったそうなの。

そこで、ある晩のこと、

「朝から晩まで立ちっぱなしじゃ、おもしろくないな。なあに、夜くらいは誰れにも見られんから、ちつとは遊びに出かけてもよからう」といつて、お寺の周囲（まわり）を夜廻りを兼ねてぶらついたと。

「おお、こりや、ええ。凝り固まった身体が段々ほぐれて、新たな力がみなぎってくるのが、ようわかるわい」

お寺が村はずれにあつて、誰れにも見られんのをいいことに、それから毎晩出歩くようになったと。

そのうちに、だんだん遠くの方まで遊びに行くようになって、人家のある所までやって来た。すると、真夜中だというのに一軒だけ灯（あか）りがともっている家があった。

近づいて、そつと窓障子（まどしようじ）の破れ穴から中をのぞいて見ると、婆さんが一人おつて、糸車をまわして、糸をくっていた。

仁王様は、初めて見る景色が何ともいえず珍らしい。

「ふーん、何やらブンブン廻（まわ）しとるが、ありや、何たらもんじゃ」

と、ふしぎそうに眺めていると、婆さんは、糸車をまわしながら、片つぼうの尻（しり）をひよいと持ちあげて、大っきな屁を、ブフワァンとこいた。

思いがけないことで、仁王様が思わず笑うと、婆さんは誰か村の人かと思つて、

「おうおう、匂（にお）うか」と聞いた。

仁王様はこれを、「仁王か」と言ったのだと早合点して、さあ、魂消た。

「やつ、わしが隠れていることを、ちゃんと知つとる。こりやいかん」

あわてて逃げ帰ると、もとの通りに仁王門の中に入って、知らん顔をして立ってござらっしゃったそうなの。

そればかり

私の調べた羽衣伝説は十六話ありました。その中の二話を載せました。

天人女房（てんにんにようぼう）

きょうの日本昔話（山口県）

むかしむかし、あるところに、一人の若い木こりが住んでいました。ある日の事、木こりは仕事に出かける途中で、一匹のチョウがクモの巣にかかつて苦しんでいるのを見つけました。

「おや？ これは可哀想に」

木こりはクモの巣を払つて、チョウを逃がしてやりました。

それから少し行くと、一匹のキツネが畏（わな）にかかつていたので、

「おや？ これは可哀想に」と、木こりは畏からキツネを助けてやりました。

またしばらく行くと、今度は一羽のキジが藤かずらにからまってもがいていました。

「おや？ これは可哀想に」

木こりはナタで藤かずらを切り払い、キジを逃がしてやりました。

さて、その日の昼近くです。

木こりが泉へ水をくみに行くと、三人の天女が水浴びをしていました。

天女の美しさに心奪われた木こりは、泉のほとりに天女が脱ぎ捨ててある羽衣の一枚を盗みとって木の間に隠れました。

やがて三人の天女は水から出てきました。そのうちの一人だけは天に舞い上がるための羽衣が見つかりません。

二人の天女は仕方なく、一人を残して天に帰って行きました。残された天女は、しくしくと泣き出してしまいました。

これを見た木こりは天女の前に出て行って、天女をなぐさめて家へ連れて帰りました。

そして盗んだ羽衣は、誰にも見つからないように天井裏へしまい込みました。

そして何年かが過ぎて二人は夫婦になったのですが、ある日、木こりが山から戻ってみると、天女の姿がありません。

「まさか！」  
男が天井裏へ登ってみると、隠していた羽衣も消えています。

「あいつは天に、帰ってしまったのか」  
がっかりした男がふと見ると、部屋のまん中に手紙と豆が二粒置いてありました。

その手紙には、こう書いてありました。

《天の父が、あたしを連れ戻しに来ました。あたしに会いたいのなら、この豆を庭にまいてください》木こりがその豆を庭にまいてみると、豆のつるがぐんぐんのびて、ひと月もすると天まで届いたのです。

「待っている、今行くからな」  
木こりは天女に会いたくて、高い高い豆のつるをどんどん登って行きました。

何とか無事に天に着いたのですが、しかし、天は広くて木こりは道に迷ってしまいました。

すると以前助けてやったキジが飛んで来て、木こりを天女の家案内してくれました。

しかし天女に会う前に、家から父親が出て来て  
「娘に会いたいのなら、この一升の金の胡麻(ごま)を明日までに全部拾ってこい」

と、言つて、天から地上へ金の胡麻をばらまいたのです。

天から落とした胡麻を全て拾うなんて、出来るはずがありません。

とりあえず金の胡麻探しに出かけた木こりが、どうしたらよいかわからずに困っていると、以前助けてやったキツネがやって来て、森中の動物たちに命令して天からばらまいた金の胡麻を一つ残らず集めてくれたのです。

木こりが持ってきた金の胡麻の数を数えた天女の父親は、仕方なく三人の娘の天女を連れてくると、

「お前が地上で暮らしていた娘を選べ。間違えたら、お前を天から突き落としてやる」

と、言うのです。  
ところが三人の顔が全く同じなので、どの娘が木こりの探している妻かわかりません。  
すると、以前助けてやったチョウがひらひらと飛んで来て、まん中の娘の肩にとまりました。  
「わかりました。わたしの妻は、まん中の娘です」  
見事に自分の妻を言い当てた木こりは、妻と一緒に地上へ戻って幸せに暮らしたということです。

『天人女房』(てんにんにようぼう) 民話の部屋―岩手県和賀郡―

むかし、あるところに長兵衛という千刈百姓(せんかりひやくしよう)がおったと。

長兵衛は芥子(けし)を作るのが上手で、前の千刈畑はみんな芥子ばかりであつたと。わけても花の盛りは見事なもので、花畑には霞(かすみ)が棚引(たなびき)、天人も舞い遊ぶかと思われるほどだと。

あるとき、長兵衛が花畑を見廻りしていると、空から美しい音色がきこえてきて、せんじやこうのほのぼのとした匂いがして、綾衣(あやぎぬ)をなびかせた天人が、舞い下りて来た。

あれあれと見ているうちに、天人は綾衣を花にかけて、うつらうつらと眠ってしまった。

長兵衛は、横からみても縦から見ても美しい天人に、すっかり魂を飛ばせて、何とかしてこの天人を女房にしたいものだと思つた。

そこで、そろつと行つて、天人の綾衣を花の中へ隠し、そしらぬ振りをしていたと。

夕方になつて天人はようやく目を覚(さ)ました。天に帰ろうとすると、綾衣がない。

千刈畑の中を、あれやこれやと探し廻つたが、どれが花やら綾衣やら、探しあてることが出来なかつたと。

長兵衛はそれを見ると、得たりとばかり、

「姉さま、何探してるな」と、とぼけて聞いた。

天人は、綾衣がなくて天へ帰られない、と嘆いた。

「ははあ、それならさつき風が吹いて、花の中を、あつちにヒラヒラ、こつちにヒラヒラ飛んでいたが、はて、どこへ行つたか。千刈の芥子畑だ、とても探しようがない。花が散つて、芥子坊主になるまで待たにやあ判らん」というた。そればかりか、「天に帰れないのなら、まずまず俺のところにござれ」と、天人を自分の家へ連れて帰り、この家の人としたと。

さて、芥子の花が散る頃になると、天人は約束の綾衣を探してと頼んだと。



長兵衛は、天人を何としても離したくない。「いやいや、花は散つたけれども、まだ葉が青々しているから」と、探さなかつた。

その葉も落ちる頃になると、また、日に夜にかけて口説(くど)かれるので、長兵衛は仕方なくそれでは、と芥子畑へ行ってみた。

そしたら、隠しておいた綾衣は、雨風にさらされて着られるものじやない。

それを知った天人は、泣いて泣いて、泣き暮れる毎日だ。長兵衛は可愛そうになって、

「実は、お前を女房にたくて俺が綾衣を隠したんだ。償(つぐな)いに、望むことがあつたら、なんでもしてやる」というたと。そして、天人は、

「それでは、蓮田(はすだ)へ行つて、蓮の花の茎(くき)を千本とつてきて下さい。私はそれで糸を紡(つむ)ぐから」と頼んだと。

長兵衛は、あちこちと駈(か)けめぐつて、それを集めた。

天人は、その花茎千本で、目に見えないほどの蓮の糸を紡ぎ、機(はた)にかけて、目も覚(さ)めるような綾衣を織り上げた。

その織りあげた日から、三七、二十一日目に、玉のような男の子を生んだ。

そしたらある日、

「お名残(なごり)惜しいことですが、もはや私の天の下での命がつかぬ日が来ました。この子は乳がなくても育つ天人子(てんにんこ)ですが、もしもむづかるときがあつたら、芥子畑へ連れて来て、芥子の花びらに乗っている朝露夕露を吸わせて下さい」と、かなしそうにいうたと。

そして、綾衣を身につけて、フワフワと空高く舞いあがって、天へ帰ってしまった。

その後、長兵衛は天人が恋しくなると、その子を抱いて芥子畑に立つておつたが、そのたびに空から美しい音色が響いてきて、天人の、長兵衛と子をよぶ声が聞こえたそう。

●お楽しみいただけましたでしょうか

この話の中から何を感じ取られましたでしょうか。何を感ずるかでその人が変わります。それもそれぞれあっていいと思います。天人女房(羽衣伝説)は、あまり知られてない内容を選びました。

(追伸)

ページ数の関係で余呉の羽衣伝説を三話追加しました。これが正統の羽衣伝説だと思います。

次の三話を読んでください

## 羽衣伝説と道真伝説

余呉に伝わる羽衣伝説は代表的なもので三つあります。それをご紹介します。

### 伊香刀美『帝王編年記』より

余呉の郷の湖に、たくさんの天女が白鳥の姿となって天より降り、湖の南の岸辺で水遊びをした。

それを見た伊香刀美は天女に恋心を抱き、白い犬に羽衣を一つ、盗み取らせた。

天女は異変に気づいて天に飛び去ったが、最後の若い天女の一人は、羽衣がないため飛び立てない。

地上の人間となった天女は、伊香刀美の妻となり、四人の子供を産んだ。

兄の名は意美志留（おみしる）、弟の名は那志刀美（なしとみ）、姉娘は伊是理比咩（いざりひめ）、妹娘は奈是理比咩（なぜりひめ）。

これが伊香連（いかこのむらし）（伊香郡を開拓した豪族）の先祖である。のちに天女である母は、羽衣を見つけて身にまとい、天に昇った。

妻を失った伊香刀美は、寂しくため息をつき続けたという。古い文献によれば、奈良時代のころ、余呉ではこのような羽衣伝説が語られていました。

羽衣伝説は白鳥処女説話の一種と言われます。余呉湖の羽衣伝説は日本の羽衣伝説の中で最も古いと言われています。

### 七夕伝説『雑話集』

昔、近江国余呉の湖に、織女（おりめ）が降りて水浴びをしていると、土地の男が通りかかり、脱いであった天の衣を隠してしまった。

織女は天に帰れず、やがて男の妻になった。

織女は子供を産んだのちも、天に帰りたい気持ちには失せず、声を忍んで泣いていた。

男が出掛けている間に、子どもが父の隠した天の衣を母に渡したので、織女は喜び、衣をまといて飛んでいった。

「私はこういう身だから、簡単には遭えないが七月七日はこの湖で水遊びをしましょう。その日なら会えますよ。」

そう母は子どもに泣きながら約束した。

織女の子孫は今もいると伝えられています。これは、余呉の天女伝説に七夕伝説が結びついたものです。余呉の天女伝説は様々に変化していきましたが、白鳥の習性そのままに「水辺に降り、水浴びをし、羽衣をまとい、子どもを産み、最後は元の所へ帰る」という構造はかわりません。

### 道真誕生伝説『日本地誌大系』

昔、湖辺(こへん)の村・川並に桐畑太夫という漁師がいた。あるとき、芳しい香りにひかれるまま、一本の柳に歩み寄ると、色鮮やかなうすものが掛かっている。うすものを取った太夫が振り返ると、美女がいて「私は天国の者。余呉の湖の美景に憧れて年に一度、水浴びをしています。どうか羽衣を返してください。」と懇願した。太夫は羽衣を隠して返さない。争った果てに美女は天に帰ることを諦めて、太夫の妻になった。天女は天上界のことばかり思っていて、涙のうちに暮っていたが、やがて、玉のような男の子を産んだ。

ある日、「おまえの母は天女様 お星の国の天女様 おまえの母の羽衣は 千束千把(せんぞくせんば)の藁の下」と子守が歌うのを聞いた。裏庭の藁の下を探すと、案の定、羽衣があった。天女は大いに喜んで羽衣をまとい、天上遠く飛び去っていった。菅山寺の僧・尊元阿闍梨は、この話を聞き、母のないおさなごを憐れんで、寺に連れ帰って養育した。この子どもはのちに、菅原是善卿の養子とすなわち菅原道真である。

おしまい

### 「言葉なさけ」

津軽の言葉の習慣。一言ことばをプラスにする事。例えば、お帰りなさい。寒かったでしようとか、暑かったでしようとか、一言くわえろと相手の心が温まる。相手がほほえめば、自分もほっと心が和む。「言葉なさけ」は、相手をおもいやり、気持ちと和ませる、元気にさせる言葉。美しく聞こえる表現を選ぶ。

### 「読み手に、遊びを残す」

芝三光の江戸しぐさ

江戸の寺子屋の本は、読み手に「校正」や「訂正」の余地も残して作られました。今日、それを「いたるところに誤りがある」とみるのは短慮です。このことを「読み手に、遊びを残す」と言っていました。それが物書きの常識（心がけ）でした。この言葉が私の力になりました。ミスすることが恥ずかしい。でも、誰にもあるんだと思えば、最後にこの言葉を付け加える事で、許して頂くようにしています。講義する時もこの言葉をもじり「聞き手に遊びを残す」と思って話すと気が楽になります。

遊びは「明日美」「明日備」から出来た言葉です。

次回は、口減らしの為に捨てられた年寄り、その知恵に救われた人達のお話「嫉捨山」を中心にお話しします。

### 出典・参考文献

「お」の字

続立川むかし話（立川市教育委員会）

「お」も字

きょうの江戸小噺（福娘話集）

仁王か

続立川むかし話（立川市教育委員会）

天人女房

民話の部屋（フジパン（株）東京テレホン放送）

天人女房

きょうの日本昔話（福娘話集）

読み手に遊びを残す

民話の部屋（フジパン（株）東京テレホン放送）

読み手に遊びを残す

江戸しぐさ（芝三光の江戸しぐさ）

（意見）質問がございましたら

大東文化大学同窓会事務局まで

E-mail [dbdousou@gmail.com](mailto:dbdousou@gmail.com)

URL <https://www.dbdousou.com>